

# 京都産業大学 ことばの科学研究センター 第 2 回研究会

日時：2026年7月22日（水）14:00～16:00

会場：4号館2階総合学術研究所会議室

## 比較対応の幻想：

### 印欧祖語における中・受動態語尾をめぐって

吉田 和彦（ことばの科学研究センター客員研究員・外国語学部元客員教授）

Jay Jasanoff は、接尾辞\*-ye/o-を持つ動詞の3人称単数中・受動態として、\*-ye-to という形式を印欧祖語に想定している。この再建形は古代印欧諸語の対応形式に対して自然な説明を与えるために、オッカムの剃刀の原理に従うと特段の問題がないと考えられる。しかしながら、いくつかのアナトリア諸語の事実はこの再建形が合理性を欠くことを示している。本発表では、\*-ye-to ではなく、\*-ye-o という再建形が妥当であるという根拠を5つ示す。

もとより祖語の再建という目標に向けて、比較方法がきわめて重要な役割を果たすことは言うまでもない。しかしながら十全な文献学的根拠に支えられていない場合には説得力を欠く結果に陥る。比較言語学と文献学という二つの学問の協調の必要性は強く認識されなければならない。

## ニヨロ語に時制はいくつあるか。

梶 茂樹（ことばの科学研究センター客員研究員・現代社会学部元客員教授）

アフリカのバンツー系の言語は、スワヒリ語やリンガラ語などのピジンに由来する共通語を別にすれば複雑な動詞構造を有する。現在調査を行っているウガンダ西部のニヨロ語やキガ語などでは時制・アスペクト・ムードによる活用形が50以上もある。純粹に時制だけを見ても、遠い過去、近い過去、今朝の過去、近い未来、近い未来など様々である。さらにアスペクトやムードにも時制が絡んだ活用形が多くある。今回の発表ではニヨロ語について、アスペクト・ムードも含めて活用形がどのような時制で表現されているかを考察し、全体としていくつの時制があるかを検討する。